遠くの星空

エコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遠くの星空

【Ｎコード】
Ｎ２１０７Ｄ

【作者名】
エコ

【あらすじ】
小さいころから厳しかった父親と母親の心情～大人になってわかった、ちっちゃい時からの出来事。何処にでもある家族が抱えた苦悩と精神的な孤独、ひとつ狂い始めて起きる苦悩の連鎖…

ちっちゃい私とおっきい私第一話

私がちっちゃい頃、まだお父さんに抱えられてたあの頃、お父さんがちゅーしてくるの、私は嫌がってるのに止めてくれない、お父さんは嫌がって泣く私が可愛くて楽しくてまたちゅーしようとするの…

「夜の星を見なさい、遠くの夜空をみなさい。」
私が４歳からよく言われた事、お兄ちゃんとお姉ちゃんがいるから三人で家の二階のベランダでよく見たな、なるべく遠くをみさないって言うから私なりに遠くを探したよ。

毎日毎日やらされたんだ、目に良いんだってお父さんが言うんだもん、めんどくさかったけど、最近怖いんだよねお父さん、反抗するとさ。

５歳から家の応接間にある図鑑やら童話なんかを読み始めたんだ。夢中になると床にねそべって読むの、ねそべって本読むの好きだったの。でもねそべって本読んでるの見つかるとヤバいんだ、怒られるんだ、頭叩かれて背中蹴られるんだよ、痛くて恐くて、いっつも大きな声で泣くんだよねちっちゃい私って。

「今日ね薬局に行ってきたよ、西国フルーツの近くにあるでしょ。でもなかったの。めぐすりの木、お金持ってなかったけど行ったん

だ。一人で行ったんだよ。薬局オバチャンはめぐすりの木なんか知らないって言ってたよ。」

7歳の時、我が家には正体不明な小分けされ半透明な袋に入った臭い粉や金色でラグビーボウルみたいな形のやつめうなぎの肝の錠剤やら巨大な干し椎茸みたいな物がたくさんあった。
それらは全部お父さんの物で私はお薬なんだろうなって思ってた。
たまに金色のやつめうなぎの肝を飲ませてくれたんだ。全然苦くないんだよ、お薬って苦いから嫌いなんだけど、味がないんだ、飲み込まないで口の中で転がして置くとトロ～となんかでてくるんだ。
目が良くなるんだって、私も体にきおつかってるって思えてなんか気分良かったよ。
お父さんはそれらを毎朝、毎晩、多分お昼にも、キチンと飲むんだよ、飲んだ後顔をくしゃっとさせて。その後に
「なんかめぐすりの木って言うのがいいらしいみたいよ」お父さんが会社に来ていく背広を用意しながらお母さんが言ったんだ。
「行ってくる」
「行ってらっしゃい」
お母さんと私、お兄ちゃん、お姉ちゃん、みんなでお父さんを見送る言葉を言う。
その後お母さんはいつもの様に私達兄弟に朝御飯を食べさせ、学校に送り出す。
私もいつもの様に家を出る、でもその日はちょっと違ったんだ。
”めぐすりの木を見つけよう、見つけたら喜んでくれる、お父さんもお母さんも”なんかワクワクして家をでたんだ。いつもは一緒の登校班の奴らがうざくて早く学校に着きたかったけど、今日はそんな事別にいい。めぐすりの木で頭いっぱいだもん、早く学校終わって欲しいな、探しにいくんだもん。

でもなかったんだ。

西国フルーツの先にあるいつも赤い女の子像の置物がある薬局に。薬局のオバチャンは聞いたことないわねぇ～って言ったんだ、私はちょっと緊張してたし知らないって言われて恥ずかしくなって顔が赤くなるのがわかったんだ。朝からの意気込みに反してすぐひるんで出てきたよ。でも、私言ったんだお父さんにもお母さんにも。”一人で薬局行ってめぐすりの木探しに行ったよ。でも知らないっていわれたよ、今日の朝お母さんとお父さんが話してたでしょなんかいいらしいって”

私は解ってるんだ。探し物の有無なんかじゃない。お父さんがどっかが悪いのを心配してるんじゃない。それ以外の事。お父さんとお母さんが私がした行為に喜んではにかんでくれる事と私に優しい眼差しをくれること。

「あら。そう。あそこの薬局におばあちゃんいなかった？腰が曲がったおばあちゃん。」

私は声は出さず顔を左右に軽くゆらす。

「あら、そう」

違う　違う　違う　そんなんじゃない。もっと　　テレビでやってるみたいに　　お父さんとお母さんは私の目を見て、ひざまづいて目線の高さ一緒にして、頭をなでて、今日は何が食べたいって聞くんでしょ？ねぇ　ねぇそうでしょ？ねぇ

１２歳私は部活に入った。バレーボール部だ。小６で身長が１６０センチになっていた私はレギュラーで、週末には練習試合や公式試合にでていた。

私のお母さんとお父さんは働いていた。共働きだった。最近お母さ

んは家の近くでやっていたパートを辞めた。自転車で15分かかる駅に行き、電車に乗って、次の駅の近くにあるデパートで働き始めた。お茶屋さんで売り子さんやってるっておばあちゃんと電話で話してた。でも社員なのよって言ってた。

家の中を見渡す。3年前とは変わっていることに気づく。
「お姉ちゃんとお兄ちゃん元気かな～東京ってすごいのかな～」
「すごいってなにがよ？」
「だって都会なんでしょ？お母さんもお父さんも東京すんでたじゃん。私だけだもん家族で東京住んだことないの」
今日は日曜日、お父さんは二階にあるお兄ちゃんが使っていた部屋で仕事らしい。
時刻はＡＭ１０時を回っている。いつもより遅い朝御飯をたべながら私は話す…
「お兄ちゃんはさ～有名なホテルで働いてるんでしょ～全然帰ってこないじゃん、お姉ちゃんは洋服作る大学に行ったんでしょ～カフェでバイトしてんでしょ？」
「あんた！口に物入れて話しするのやめなさい」
「い～なぁ東京。楽しいのかな～だから帰ってこないのかな～」
「あんた～…」
「わぁかったよ！食べてからね！」
私はトースト二枚とウインナーと昨日の晩御飯の残りの煮物を食べた、煮物の中の人参は残した。
「ごちそうさま。
ね～東京って楽しいの？
」お母さんはお茶をすすっている。
「あんた自分の食べたお皿ぐらい片付けなさい」

「東京の事教えてよぉ。さっきから聞いてんじゃん」　「別に楽しい事ばっかりじゃないでしょ、早いのよあそこは」
「何がぁ？」
「色んな事よ」
「だから何が？」
「あんたなんか勘違いしてるんじゃない？勉強と仕事してるんだからね、こっちと違って色んな人間もいるし、なんて言うのかな…ペースがちがくて。お母さんなんか東京の専門学校行って…あんたのお姉ちゃんと同じ服飾のね、一年は寮にいたけど…なかなか慣れなくてねぇ、結局実家から通って卒業したのよねぇ…」
「ふーん…」
テレビで見た東京の印象とは違うやけにあっさりとしたあまり良い印象はなさそうなお母さんの言葉に私は”お母さんはそうだったんだろう”と思った。
「今からお掃除するから自分の部屋に行きなさい」
私は何も言わず春から秋バージョンのこたつ布団のない堀こたつから出て階段を登って自分の部屋にむかう。
階段を上がって、右に廊下があり、右手には3年前までお兄ちゃんの部屋がある。お兄ちゃんが就職してからは私の部屋だった。廊下の正面は去年までお姉ちゃんの部屋だった。去年大学に行ってからこの部屋が今の私の部屋である。階段を登り終えて、廊下を歩く。元お兄ちゃんと私の部屋の障子が人が通れる位、無造作に開いている。
お父さんがいた。
お兄ちゃんの部屋時代から有る学習机に座って、何やら参考書みたいので勉強してるみたい。ここからだとお父さんは背中を私に向けていて、私は勉強しているお父さんの背中を静かにのぞいた。
”何か変”
何か変な気がした。ノートに顔が付きそうな位猫背だった。参考書も両手で持って顔にくっ付けたり。電気スタンドの位置を変えたり

戻したり。何かイライラしながら勉強してる様に見える。
廊下の左手はベランダで、洗濯物が干されていた。カーテンごしと洗濯物の間から見える景色は家の前に有る田んぼと晴れた青い空。白の絵の具を薄く太い筆でテキトウに引いたような雲。周りの建物は洗濯であんまり見えなかった。

私は昼間の景色を見ているのに、頭の中、おでこのあたりで、夜の星空を見ていた。遠くで赤い光が着いたり消えたりした景色。”あれは高い建物の光で星じゃないんだよ”と言うお父さんの横でみた景色。冬は空気が冷たく澄んでいて、昼間には聞こえない電車の走る音が聞こえた景色。遠くを探して吸い込まれそうになる…怖くて目を閉じた景色。
いつから見なくても怒られなくなったんだろう。

私はもう一つ思い出す。
「あんなに星空みたのに、流れ星なんて見たことない」
お父さんはまだ私に気付いてない。私は自分の部屋のドアを音がならないよう、こっそり開けて不完全にしめた。

私は高校受験を控えていた。夏休みで部活も終わり、学校に行くとみんな受験モードらしく話題も勉強の事が多くなっていた。
中1はバレーボール部。練習が辛いと言うか、ミスをしてもしなくても怒鳴られ、単なるスポーツなのにプレーをミスしたり返事が小さいなどささいな事で往復ビンタが飛んで来る事が当たり前の環境に、理解ができそうもなく、1年で辞めた。
中2からは体操部に入った。途中からの入部の私は補欠だった。
体操部なんて未知の領域だった私に、同じ学年の髪の毛が茶色くてスカートを短くするのに日々精進している五人の女の子グループに誘われ入った。

準備体操から始まり平均台・床運動・その他にも大会では種目はあったが器具がなかった。私が持っていた電気グルーウ”のＣＤをかけながらマットの上をゴロンゴロン回って準備体操した。
大会ではレギュラーの人達はレオタードを着た。器具が揃ってなかったから跳馬なんかは取り敢えず登って降りた時ポーズを決めていた。段違い平行棒では逆上がりをして、床運動ではひたすらでんぐり返しをしていた。団体で出ているのに個人で出場している人よりも点数が少なかった。
でも楽しかった。監督だった女の先生は
「おまえらのせいで私は他の先生に嫌われるんだ」とか言うから、大会帰りに支給されたタクシー代でみんなでハーゲンダッツでアイス食べてやった。ある日部活をみんなで無断でやすんで、監督が体育舘に入って行って、すぐに物凄い怖い顔して出てくる所をみんなで隠れて見てた事があった。
「うわっすげー怒ってんじゃーん」
「キャハハハハ～」
「やばい！目あった！ばれてるよ～」
監督はうちらに気付いたけど校舎に入って行った。
「無視された～キャハハハハ」
「何様あいつ～」
「キャハハハハ～」

確か謝ってないと思う。呆れられてあんまり怒られもしなかったと思う。こうゆう下らない事をみんなでするのが楽しくてしかたなかった。

中３の夏も終わり、受験勉強も本格的になっていた。辺りを見渡すと頭の良し悪しに関係なく塾に行ってる子があちらこちらにいて、家庭教師という少数派もいた。
「塾ってやっぱいーのかなぁ」私は塾に行っている友達に尋ねる。
「分かんない所とか細かく教えてくれるよ～隣の中学校の子もきてて～かっこいい人いるの～もぉ本当かっこいいのぉ」
家庭教師派の友達にも尋ねる
「うーん家に来られるのって結構うざい。お母さんがさぁ塾なんかじゃあんたはダメだって言ってさぁ～」
私はあんまり塾に興味がなかった。お姉ちゃんに仕送りしてるのも知ってたし、塾ってお金かかるイメージもあったし、お母さんもお父さんも行けって言って来なかったから。
「あたしの行ってる塾ねぇ、毎日体験入学してるから来てみれば？あたしも今日行くし～おいでよ」

塾ってどんな感じ？というわけでその日に体験入学をした。誘ってくれた子と同じクラス。数学のクラスだった。
午後６時になる１分前に４０代後半で黒っぽいスーツにグレーっぽいネクタイの男の人が入ってきた。学校の先生達よりもどこか冷たい感じがした。
「じゃ　始めます。」
あっさりと授業が始まる。私は体験入学者専用のかべぎわの列の前から三番目に座った。
「あなたが見学希望の方かな？」
「はい」
「解らないことがあれば質問してくださいね」
「はい」
すぐに授業が始まった。隣には誘ってくれた友達が座っている。いつもは違う席だけど今日はここらしい。

「ねぇ今のわかった？あたし全然わかんないよぉ」
小声で隣にいる友達が聞いてくる。「えっ…私もわかんないよぉ」
学校の授業と同じでお喋りは禁止らしい。解らないと言った友達はそれっきり何も話さずノートに何かかいている。

「なんだ？ここ、無しだな」
そう思った。
隣の友達が聞いてきた問題、本当は、わかった。
周りを見渡すと大体の子が真剣そうに問題を解いている。なかにはガムかんで黒板だけずーっとみてる子、眠気を隠しきれなくておもいっきり机にほっぺた着いて寝てる子…
ついでにさっき話した塾の先生が、かつらだった…。

みんなが行っている塾に憧れも少しあって見学に行ったけど。やっぱり興味がなくなった。私は自分流で勉強する事にした。
私の好きな科目は社会と理科だった。
社会は歴史と地理にわかれていて、どちらもすきだった。
国語、数学は嫌いだった。特に数学の先生は中２の時の担任で、大嫌いだった。女の小綺麗な５０過ぎのババアで甲高い声で理屈っぽくて、冗談が通用しなくて、エコひいきする奴で独身だった。あまりにも嫌いで中２の終わり頃、クラスに２０人はいた女子の半数以上が校長先生に担任変えてくれと抗議をした。
その願いが通じ中３になると新しく赴任してきた美術専門の男の先生に変わった。まだ新婚だったらしく嫁の話をちょいちょいしてくれた。
英語の先生は新体操の顧問でスタイルが抜群で雪が降ろうが、風が強かろうが、毎日膝上１０センチ以上のタイトなスカートを履いていた。英語はまぁまぁ好きだった。
なんで社会と理科が好きだったかと言うと、暗記をすれば大体の問

題が解ける事だった。意外と頭のいい奴らは数学・国語・英語は得意だが社会・理科はまあまあというパターンの奴らが結構いた。中学校の理科はまだ計算問題が少なく暗記を必要とする問題が多かった。
なので私は勉強のやり方で、暗記を最優先にした。
しかもお風呂に入りながらずっと教科書をよんだ。気が付くと四時間入っていた事もあった。社会と理科の教科書は1．5倍に膨れ上がりヨレヨレになったが効果は抜群だった。
数学、国語、英語は勘でこなしたが、社会と理科には自信があった。
その結果常に中の上レベルの成績を常に確保していた。

「ねぇねぇ、私。行きたい高校あるんだけど。」

日が暮れるのも早くなり、蒸し暑かった空気はさらっとした風に変わり、秋を運んでくる。楽しい夏は終わったんだと知らせに来る。
「それそろ三者面談の日取り決めるからって先生いってるからさ～」
今日は水曜日、お母さんは遅番でデパートは午後8時までだけど家に着くのはいつも9時過ぎ。9時10分までには必ず帰ってきた。
まだ着替えもしていないお母さんに私は話しかけた。お父さんはお風呂に入っていた。
「あんたお茶淹れてちょうだいよ。お母さん着替えちゃうから～」
「うん…」
私は今すぐに話しておきたい、お父さんがお風呂から出る前に。と思っていた。着替えが終わりお母さんが春～秋バージョンの堀ゴタツに入ってきた。
「ちゃんとカレー煮込んでくれた？」
「うん。煮込んだよ、一時間ぐらい。なんでいつもカレーのルー入れただけでかき混ぜないでおくの？しかもお水がいつも多いんだよーけっこう煮込んでもうすいよ」
「ハァーお茶がおいしい…遅番の時は仕事の前に作るからきちっと

作る時間ないのよ、お水はいつも目分量ねー、カレーは煮込んだほうがおいしいんだからその事もお母さんは計算して多目にしてるのよ！」
「あとさーなんでいつも家のカレーはアサリなの？お肉がいい」
「お肉は体に悪いの・お母さんのカレーはシーフードカレーなのよ！」
「お父さんだってお母さんの作るカレーはいまいちだって言ってるんだから！」　お茶をするお母さんの眉間に立て筋が出始める。機嫌が悪くなり始めてるサイン。
「あんたどーするの高校」
「あぁー。あー、あのね。あそこ。服飾デザイン科がね去年からできた緑桜（りょくおう）高校」
「あんた、そこって昔農業高校だった所じゃない、駄目よそんな所。進学校にしなさい。」
「なんでぇ？やだよ！緑桜に行きたい！」
「高校は進学校に行きなさい。その後よ、何がしたいとかは。とにかく駄目よ、進学校にしなさい。北山女子とかいいじゃない」
「えーやだぁつまんなそーだしあそこ頭良すぎだし…やだ！緑桜いきたいのっ」眉間にシワを寄せてお茶をするお母さんは何も答えなくなった。
「もう決めたのぉ緑桜にするのぉー今度の三者面談で先生に言うんだから！」
お風呂場の方からお父さんのお風呂上がる時特有なガタッバチャっという音が聞こえて来る。早くこの話しを終わらせたくなり私は焦り始める。
お母さんは何も話さず私の方も向いてくれない。
「進学校にしなさい。」
さっきよりも低い声で、私に言い聞かせるように。
「やだっ。」
私もお母さんに言い聞かせるようにさっきよりも高い声で…目を真

っ赤にして、涙声で言った…。

私はお父さんがお風呂から出きたと同時に二階の自分の部屋に行く階段をかけあがった。”ムカつく・ムカつく・あのクソババァ”

「あームカつくー、あーもぅ絶対勉強なんかしねぇよっ！！ムカつくんだよ！マジで！」自分の部屋に入ったとたんに下の階の奴に聞こえるように怒鳴ってやった。

”ガタッ””ダッダッダッダッ”スリッパを履いたお父さんの階段を上がる足音。怒った時の足音。

”バタンッ”私の部屋のドアが開いてお父さんが入ってきた。石鹸の匂いとお父さんが頭につけてるトニックの匂いが部屋の匂いを変える。

「おまえ！親に向かってそんな口のきき方があるか！」

「うるせーなぁ、人の部屋勝手に入ってくんじゃねーよ」

「何ぃ！」

と言うと同時にお父さんはベッドに座っていた私にグーで頭をなぐってきた。

「いってぇなぁ！早くでてけよっ」

私が言ったとたん頭をグーで、右頬っぺたにマジなビンタをくらわせた。私は泣きじゃくった。布団に入って泣きじゃくった。お父さんは私の部屋から出て行き、階段を降りる足音は普段の足音と近いかんじになっていた。

私は中学校に上がると本格的な反抗期に入った。

中学校に入る前の春休みに、高校を卒業したお兄ちゃんは就職し上京した。その春休みにお兄ちゃんとお姉ちゃんはテレビのチャンネル争いからケンカになり、お兄ちゃんがお姉ちゃんのお腹に蹴りをいれた。それ以後二人は一切口を聞かなくなった。中3になる前の春休みにはお姉ちゃんが東京の大学に入学が決まっていたので独り暮らしを始める為上京した。

中3になって家の中は三人家族になっていた。その三人は毎日毎日

イライラしていてちょっとした口論から大喧嘩になり物を壊す者もいた。お母さんは自分が怒ると大きな声で怒鳴るのに、お父さんと私が怒鳴るの時は
「近所の人に聞こえるから静かにして！」と怒鳴っていた。私がちっちゃい頃から夫婦喧嘩が絶えない家だったし、私が反抗期真っ只中で、この家にこの３人という状況はこの家族はじっまて以来の悲惨な組み合わせになっていた。

お父さんが私に暴力を施した一件以来私はお父さんを必要最低限の会話以外は話しもせず・無視をした。
その数日後、制服は衣替えの時期になり春～夏バージョンの白い半袖のシャツに、紺色のプリーツスカートから紺色のセーラー服に変わった。
セーラー服の襟の部分はグレーで紺色のラインが２本入っていてありそうでなさそうなセーラー服だった。ひざたけ１０センチに自分で裾上げしたプリーツスカートと脹ら脛の真ん中位の丈のスカートをＴＰＯによって使い分けた。たまにうるさい女の先生に短い丈の方のスカートを注意され、一回だけ”その場で脱げ”と脅された。結構お気に入りだったセーラー服を着るのも最後の衣替えをした頃の朝、学校にいく前に事件がおきた。

「ねぇ、そのコップとって」制服を着た私は朝御飯の皿洗いをしているお母さんの横で言った。
「どれ！どのコップ？これのこと？」取っ手の付いたまだ洗ってないマグカップなのかとそのコップの泡をゆすぎ出す。
「違うそれじゃない！ガラスのやつ！洗ってあるやつ！お母さんの目の前にあるやつだよっ」
「それなら”グラス”っていいなさいよっ！忙しいんだからっ、あ

んたがとりなさいよホントややこしい子ねぇー」
「うるせーな、あんたが勘違いしたんだろっ」
お父さんは３０分前に出勤していてこの家にはお母さんと私二人きり。バトルモードに突入…。
「あんた、よそに聞こえるから朝からよしてっ」
「お母さんの声十分でかいくせに何言ってんのぉ」
「あーもぅーうるさいうるさい、早く学校行けっ」
「何その言い方ぁ、ムッカつくーっいっつも怒ってばっかりでさー世間体ばっかりきにしてさー」
「うるさいわねこの事のなにが世間体なのよっ！くだらない」
「下らなくないよすぐよそが近所がどうだとか・お母さんが悪くても私が怒鳴ると怒鳴った事に怒るじゃん！高校の事だって昔農業高校だったのがあんたの好きな世間体に合わないんでしょ！自分でコップとるから、そこどいてっ」私は無理矢理横から、手が洗剤で泡だらけのお母さんを乱暴に押してコップを取った。
次の瞬間。シンクの横に置いてあったザルに入った生卵をお母さんは私に投げつけた。二回投げてきた。とっさに私も左手で顔をガードしたため、生卵は制服の左手・襟・胸・スカートの裾と左膝・靴下にベローンと染み込んだ。殻は以外にあまり付かず床に落ちた。

私はクラスの仲の良い友達に家で起きた親子バトルをよく話した。その卵事件後いかにも機嫌悪そうな顔で登校してきた私を友達たちは何かあったとすぐ気付いてくれた。
「おっはよ～あれれ～またやったでしょ～今日は一段と機嫌悪そうだよ！」
「まぁね。ヤバイよ今日は」
「顔に出てるよ～キャハハ～何があったの」
私は濡れた布巾でもなかなか落ちなかった右腕を見せた。学校に着く頃には染み込んだ生卵が固まり制服はその部分だけ色が濃くなり光沢を帯びていた。

「生卵。投げつけられました。」
「まっじてぇぇ！ひどいね！」
「あのクソばばあ～とうとう武器使い始めたよ。」
「げぇームカツクねーやりかえしたの？」
「いや。しませんでした。」
「あれれー大人じゃん！よしよし可哀想でしたね、よしよし」
友達は左肩をさすってくれる。丁度担任が出席簿を持って後ろのドアから入ってきた。この担任は不意討ちで後ろのドアから入ってくるということをちょくちょくする人だった。

「なんだぁ～肩でも骨折したか？」
「えっ？あ～したした！病院行くから帰っていい？ですか？」
あまり教師ずらしないこの担任に、私はいつも敬語を使い忘れそうになる。
「なぁーにいってんだ！お前またお母さんと喧嘩したんだろー、やめとけよぉお母さんいじめんの！わたかっか？」
出席簿て私の頭をパコッと軽く叩く。
「やだ。わかんない。だってひどいんだからぁ！見てこれ。卵投げられた。」
「なにぃ！お前が生意気な事言ったんじゃないかぁ？もっと仲良くしろよぉ、なぁ？」
「私からするとお母さんが生意気だもん」
「それが生意気だっていうんだぞ！ほら席に付けぇ！よくふいとけよカビカビになるぞ」
私は上目遣いで担任を見ながらはーいと小さく言って席に着いた。
この担任は中1と中2の担任とは違うタイプの教師だった。今までの担任はスキがない感じがしたし、自分はあまり好かれていない感じもしていて、必要以上に話す事はしなかった。
しかしこの担任は違かった。やたら私を気にかけてくれてる気がした。何か私がしでかして怒った時も

「どうだ？最近は？」と最後優しく聞いてくれた。
ある日私が学校で指定されている鞄を持たず当時はやっていた腰紐が着いたリュックサックで登校したら、抜き打ちの登校指導があった。”まずいな”と思った私は昇降口から入らず職員専用入り口から入り、リュックサックを教室に置いてから靴を靴箱に入れた。

速攻ばれた。用務員のおじさんがバッチリ見ていてちくられた。校内放送で担任が私の名前を呼び職員室に来なさいと連呼した。
案の定。職員室で怒鳴られた。
「なにやってんだ！お前は」といつもよりもテンション高目に怒られた。それから担任の机の上にあった青いファイルでバコっと一発叩かれた。結構つよめで頭がジーンとした。
「すいませんでした」
「もおすんなよ。わかったな！わかったなら教室もどれ」
「はい」
私が教室に戻った後すぐに担任も入ってきた。朝礼がはじまる。朝礼が終わり一時間目の数学までにあと5分ある。みんなは数学の教科書やノートを用意しながら雑談を始める。
担任が教室を出てドアを閉める寸前に私をちょっと睨み付けるように手招きした。”げぇー何だろう”担任が廊下に出て行ったので私も廊下に向かう。
それに気付いた友達が心配そうな目線を私に向けた。

「頭？大丈夫か？」
「平気です」
「そうか。悪かったな。レディの頭づついて」
「あ…大丈夫。です…」
「一時間目は数学かぁ？お前寝るなよ！しっかりやれよ」
「はい」
「よし！教室もどれ！」

「はい…」

何かがスッキリしたらしく担任は軽い足取りで職員室に戻って行った。

”もしかして…私の頭叩いたの気にしてたのかな…”きっと。おそらく。そうだった。

私は教師という人間がいまいち馴染めなかった。

あいつらは確かに正しい事を言ってくる。

だが。あいつらも人間だ。生徒の好き嫌いを微妙に隠しきれないし。その日の機嫌の良し悪しも上手くコントロールしきれてない。学校側が決めた担任や教科ごとの先生。そいつらの言うことやることに”はい”と言って従うルール。あいつらは教師という仕事のプロかもしれないが、こっちだって生徒のプロだ。先生の不具合をすぐに感じとる。表面的な良し悪しじゃあない。その奥にある人間的な部分。

中3の担任はうかれた新婚話や物忘れが多くてすぐ職員室戻る。男子には

「おまらイカくせぇぞ！よく洗え！」って毎日言うし。美術しか本当にできなそうに見える。ベテラン教師によくお小言を言われてる現場をよく見掛けた。生徒のプロからも言わせて貰うとまだまだ修行がたりん！と、ツッコミ所満載だった。

担任変わるとクラスの雰囲気も変わる。

中2から今のクラスメイトと一緒だけど、みんな喜怒哀楽が満載になった。いいクラスだった。

その奥に持っている温かい人間的な部分をひけらかしてくれる。

そんな先生だった。

そんなこんなで三者面談の日がやってきた。お母さんは緑桜行きは絶対反対を貫き、それはお父さんも同じらしく、当日の朝は冷戦状態だった。

「お父さんからも言って下さいよ！進学高にいけって！」

「…」

朝ご飯。お母さんは台所で自分のお弁当を作っている。今日は三者面談が終わってから出勤らしい。お昼休みの後すぐに私の番だ。薄ピンクで小さい花柄の薄いこたつカバーを掛けて、まだスイッチはＯＦＦな堀ごたつの食卓にお父さんと私が向かい合ってご飯を食べている。

「そうだな。高校は進学校にしなさい。その方がいい。お父さんはおまえの為に言うんだぞ」

予想に反して落ち着いた静かな口調だった。同じ様な事を何回もお母さんに言われたけど、言い方と声の大きさによって聞ける事と聞けない事がある。

「いやだ。」

でも、嫌だった。

「本当にその～なんだ…服飾デザインか、やりたいのか？」

「うん…」

「そうだとしても、高校は普通科がいいんだ。やりたい事は変わるもんなんだ。そんな物なんだ、お前のような時期は」

「……」

「でも偉いぞ、何かしたいんだろ？それは決して悪い事ではないんだ、ただ、お父さんは進学校を薦める。もうこれで話しは終わりだ。後はお前が決めなさい。」

「……うん」

マーガリンを塗ったトーストをずっとかじったまま、お父さんと目を合わせずにきいていた。

正直よくわからなかった。正直、服飾デザイン科という響きにひかれてるだけだった。一つ歳の上の美人でお洒落な先輩が行っているのに憧れているだけかも？だった。制服も可愛いからだった。
「あんたの教室三階よね？３の６でいいのよね？
一時にいけばいいのよね？」
「そーだよ」

お父さんが出勤して、３０分後私も家を出た。学校まで歩いて２０分。自転車通学出来る一歩手前のエリアに私の家は建っていた。
お母さんが学校にくるドキドキ感は嫌だったけど、給食が終われば帰れる三者面談のある一週間。昨日は学校が終わって体操部だった友達、五人でカラオケに行った。早く帰れる事は嬉しかった。

「じゃあね～バイバ～イ」
三者面談のある６人以外さっさと帰って行く。教室の窓側の一番前の席とその後ろの席と、それらの隣の席を合わせ、三者面談ブースがセッティングされている。担任は窓側一番前の席にスタンバイ。
１時３分前にお母さんは来た。
やたらニコニコ、ペコペコしているお母さんを担任もニコニコ、ペコペコしながらブースにエスコートする。担任と私達親子が向かい合って着席。
「ではよろしくお願いします。今日で願書提出する高校を決めていきましょう。どうですか？お子さんとは話し合いなどしましたか？」
「そうですね・この子の父親とも話した結果、進学校でお願いします。」
”なにをペラペラ話してるんだ？こいつ”腹の中で私は叫ぶ。
「そうですかぁ。それじゃあいいのかな？進学校で話し進めて」
担任は私の方を向いて確認をするかの如く聞いてきた。
「何言ってんのぉ？緑桜の服飾デザイン科だって言ったじゃん！！」

お母さんに抗議を私はした。
「だってぇ…お父さんも言ってたでしょう…」
家バージョンではなく世間体バージョンでお母さんも返してくる。
先生もピリピリした私達親子に苦笑いをうかべている。
「私の方でも希望を聞いていたので、緑桜か進学校の西陵（さいりょう）で進めて行こうと思うんですが…」　「うちの子北山はどうですか？」
「無理とは言えませんが、安全なのは西陵ですね」
私はずっと黙っていた。
実際進学校でもいいやって思い始めてはいたけど、完全にお母さんに主導権がある感じが気に入らない。
「西陵ですか…お姉ちゃんも西陵だったしね。いいじゃないの？西陵でも」
私に合意を求める。
”受験するの私なのにさっ・なにが西陵でも？だ”
「先生もな高校行く時に工業高校にするか普通科の進学校にするか考えたんだ。結局進学校に行ったんだけど、高校の三年の間で美術に興味を持って、大学は芸大に行ったんだ」
「そうよ、いいじゃない。高校は進学校でね。ね？先生、西陵でお願いします」　「では、いいかな西陵合格に向けて頑張るということで」
私は膨れっ面で下をむいていた。
「お願いします」
お母さんが答えてる。
「大丈夫か？今日決めないでもう少し考えてもいいんだぞ」
ずっと下を向いている私に先生は問いかける。
「西陵でいいです。お願いします」
下向いたまま私は答えてた。

三者面談が終わった。お母さんと昇降口まで歩く。お母さんはスタ

コラサッサと行ってしまう。”あぁーあ・きれてんねあの様子じゃあ”
わざと私はゆっくり歩いた
「早く来なさい、お母さん仕事あるんだから」
車で来ているお母さんは私と一緒に帰る気らしい。
おそらく私の態度ご立腹だろう。狭い空間に二人が居るのは、経験上よくない。
「一人でかえるから、先行っていーよ」
「勝手にしなさい」
お母さんは車でブィーンと行ってしまった。

西陵に決定された。私立も滑り止めで二校受ける。
お母さんの思い通りに事が進んで行くのに、三者面談の当日、仕事から帰ってきてたお母さんは機嫌の悪く・次の日の朝ご飯の時は何かにつけて私を非難した。”食事の仕方は家柄が出る”・と豪語するお母さんは、肘はつくな・左手をだせ・箸で皿をひくな・うまいじゃなく美味しいと言えなどなど・うるせーことばかり言いやがる。
「うっぜーな！もっと楽しい会話ないのかよ！わざとやってんだよ！」

まぁこんなことは毎日の事だ。どうでもいい。そんなことより他問題がある。
西陵高校
受験希望者
私　ひとり　　な事。

西陵高校　　すげー
遠い　　事。

わざと落ちようかな…まじで…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2107d/

遠くの星空

2010年11月21日03時17分発行